

1881年

[サラ・スミスは1880年に米国長老教会の派遣婦人宣教師として来日した。彼女が最初に赴任したのは、東京築地にある新栄（しんさかえ）女学校であった。この女学校は、後の女子学園の前身の一つである。]

p. 80

本年 [1880年] は、スミス女史、デイヴィス女史、アレグザンダー女史が教師としてこの宣教団に加わった。

p. 82

東京築地42番地にある女学校 [=新栄女学校] では、運営側にいくつかの重要な異動があった。年度当初、同校はエルドレッド女史、ゲーリック女史、およびリート女史によって運営されていたが、この年度中に先の二名が結婚した。「内陸」での任務から戻ったトゥルー夫人が同校での元の職に就き、リート女史、スミス女史と共に仕事を続けている。同校について、トゥルー夫人が次のように話している。「年長の生徒の一部が私どもの元を去りましたが、残っている生徒で十分学校の雰囲気望ましいものに保たれておりますので、新入生は難なく溶け込んでいます。我が校の生徒40名のうち20名がキリスト教徒です。今年学校を去った7名もキリスト教徒です。」トゥルー夫人は市内の離れた場所にある別の学校にもご自分の時間を割いておられる。この学校は大いに夫人の影響を受け、現在では実質的に私どもの監督下にあり、おそらく同校のおかげで許可を得られるようになり、女性1名ないし2名が外国人居留地外に居住しながら市の中心部で仕事をすることが可能になるであろう。

1882年

p. 89

築地 42 番地の女学校 [=新栄女学校] からの報告によると、志願者多数のために、同校は入学を断らざるを得ない。学年暦の当初からこの女学校は L. リート女史およびスミス女史の監督下にある。

1883 年

p. 106

東京築地の女子寄宿学校 [=新栄女学校] からはまだ報告が届いていないが、同校はスミス女史、I. A. リート女史、L. リート女史、およびリード女史による監督の下で成果を挙げているようである。

1884 年

p. 114

「函館における新しい教会の組織化ですが、函館では桜井ご夫妻からご援助いただき……」

p. 116

各女学校の状況は相変わらず満足のものである。東京においては築地の女学校 [=新栄女学校] は期待していい状況にあると報告されている。スミス女史が健康を害されたため、順調である女史の仕事はさしあたって停止されており、女学校はリート女史とリーナ・リート女史が監督している。同校の上のクラスの生徒たちは、自分はキリスト教信者であると言明している。

1885 年

p. 123

スミス女史はこの年 [1884 年] を札幌と函館で過ごした。札幌では独立教会において多大な貢献をし、函館で我々の宣教団中の弱小で幾分知識にかける教会を指導している。

1886 年

[この年の報告にはスミスの仕事についても学校についても直接の言及はない。]

1887 年

p. 151

サラ・C・スミス女史は本年 [1886 年] 函館を離れ札幌に移り住み、宣教団の同意を得て公立学校 [=北海道尋常師範学校] での職を引き受け、同校にて一日 2、3 時間過ごしている。これにより人々から尊敬され、自由にできる時間ができ、一日の一部を自宅で少女達のクラスを指導したり他の宣教の仕事に取り組んだりする時間に充てている。

1888 年

p. 162

スミス女史は引き続き札幌にて尋常師範学校で教鞭を取っておられる。この職を引き受けるにあたり、女史は宣教団の同意を得ている。同職が女史にキリスト教が有用である場を開いたためである。同校の生徒 19 名がスミス女史の指導する聖書の授業に出席しているが、そのうち 3 名はキリストへの信仰を告白

している。これに加えて、スミス女史は独自に学校 [=スミス塾] を設立し [1887年]、生徒数は 40 名を数え、このうち 11 名は寄宿生である。日本人教員 2 名がスミス女史を補助しているが、この 2 名は番町で訓練を受け、うち 1 名は幼稚園を担当している。行政当局は女史の仕事を評価していることを示そうと、女史の家に加え、大教室を建築した。2 階部分には裁縫室と共同寝室がある。スミス女史には仕事が大いに励みとなってはいるが、複数の部門を監督することが負担にもなっている。

1889 年

pp. 165-166

スミス女史は、極北の重要な都市である札幌で、尋常師範学校との関わりを継続している。一日の一部を師範学校での教授に充て、残りの時間をより直接的な宣教の取り組みに充てている。かの地での仕事についてスミス女史は次のように書いている。「二年前に始まった我々の女学校 [=スミス女学校] は大変うまくいっています。年長の女子のうち 13 名が受洗しまして、敬虔な女性キリスト教徒になると断言しております。このほか数名は両親からの承諾を待つばかりです。師範学校にはキリスト教徒が 5 名います。二年前にはひとりもいませんでした。8 月 26 日には、札幌から三日間かかる紋別という土地で、新しい教会の献堂式に出席しました。大きくて立派な教会です。造りも良く、仕上げが終わり家具・調度品も備わっています。その教会が、大勢の謹聴する人々でいっぱいになったのです。それは私たちキリスト教徒の心が喜びで満たされる光景でした。私はそこに居合わせた唯一の外国人でした。日本人の牧師 5 名と 7 名の長老と執事が壇上にいました。この町で最初のキリスト教徒が洗礼を受けたのはわずか二年前であること、この教会には 100 名以上の会員がいること、この会員たちが自分たちの牧師に十分な給与を払い、教会を建て調度品も整えて、その中で真の神を礼拝すること、こうしたこと全てを思い起こすとき、驚嘆すべきことのように思えるのです。

1890 年

p. 124

蝦夷地にある札幌の女学校 [=スミス女学校] は、休暇でスミス女史が不在の間、キャサリン・ライト女史が監督している。ライト女史は通常の校務に加え、午後には婦人たちのためのクラスを教えている。報告には詳細がない。

1891 年

p. 125

休暇でスミス女史が不在の間、キャサリン・B・ライト女史が札幌の女学校 [=スミス女学校] を監督した。ライト女史は次年度スミス女史と共に仕事をする事になっている。同校での仕事量が女性一人の手にはあまるほどに増加したためである。同校の報告によれば生徒数は 60 名で、結婚や他の土地への転居などで学校を去る者が多数いたにもかかわらず、この数字である。日本基督教会と共同で、本年、仙台にある改革派宣教団の一会員によって教会が一つ設立された。この支部の女性たちは日曜学校 3 校を運営しており、生徒数は 3 校合わせて 200 名である。当地での宗教への関心は希望が持てるものであるとスミス女史は報告している。礼拝への祈禱会への出席者が多く、キリストへの信仰をまだ公言していないものの非常に興味を持っている女生徒が女学校に大勢いるとのことである。

1892 年

p. 159

札幌での仕事に関してスミス女史は下記のように書いている。

「札幌における我々の仕事についてですが、順調であるのご報告できます。

我が校において、仕事に必要なものが現在ほど揃っていたことはありません。待望の校舎拡張工事が9月1日に完了し、素晴らしい語学実習室が二部屋できまして、我々にとっては初めての語学実習室となり、また同じように必要であったのですが、寮も広くなりました。到着したての新しいオルガンのおかげで、音楽教育に長らく必要と考えられてきたものが満たされました。今年我々は新入生を確保しました。しかしながら他校においても感じられていると同様の対処すべき問題、すなわち生徒の大半をある一定の期間学校に留めておくことが出来ないという問題があるために、出席者数は例年通りであり、女学校全体で60名から70名の間です。」

スミス女史は、担当している聖書の授業において生徒達の宗教科目への関心が増してきていることを感謝しながら書き留めている。女史は安息日学校三校を監督しており、出席生徒数は合計で約100名である。

1893年

[この時期の報告には当時多くの日本人が感じていた憤りについての言及が多いのだが、これは徳川時代末期から開国後にかけて、日本と諸外国の間で結ばれた条約に対する怒りであった。こうした条約はあまりにも不平等で日本国民に対する侮辱であるとの考えが広まっており、反外国感情の高まりとともに、条約改正への試みが強まった。]

p. 134

札幌での仕事は幾分落胆させられるものであるとスミス女史は報告している。外国人排斥の感情が北海道のこの町にまで到達しているのである。元々この土地にいる牧師がつまらぬ攻撃を受け、ある著名なキリスト教徒の家は、その人物がある改革を導入しようとしているという理由で、暴徒に襲われた。札幌の農学校には政府の支援を受けているキリスト教の大学ではないかとの嫌疑がかかり、当局によって財源を一万円削減された。札幌の牧師の一人であり、農学校予科の長を務める大島氏は、脅迫状を何通も受け取っている。スミス女史は

学校に出席する生徒数の減少が深刻であると嘆いている。しかしながら希望がないわけではない。女史は次のように書いている。

キリスト教徒たちはより熱心であるように思われます。また聖餐式が行われる安息日には必ず1名から5名ほどが洗礼を受けます。女学校の年長の生徒たちは全員、学校でも、聖書の授業においても、日曜学校でも、熱心に勉強しています。

スミス女史には、誰かもう一人、女性宣教師の同僚からの支えが大いに必要である。

1894年

p. 166

キャリー・H・ローズ女史が休暇から戻り、札幌でのスミス女史の仕事に加わった。

p. 170

札幌の女学校 [=スミス女学校]。——以前の年月と同様、北海道のこの支部で、スミス女史は勇敢にも単独でこの砦を守ってきた。しかしながら現在、キャリー・H・ローズ女史が加わった。彼女は女子学院に勤務されていたが、本人が同意して札幌へ転任となった。この増員は長らく必要とされてきたものである。スミス女史には誰か仲間が必要であったし、仕事が多忙であったためである。女学校には47名の生徒が在籍し、三学科に分かれて運営されている。校舎に必要なものは行政当局 [=道庁] から供給されている。学校の生徒のうち、8名はキリスト教徒であることを公言しており、他に5名が受洗希望を表明している。札幌には定期的に組織されている信者の団体があり、同団体の日曜学校の生徒数は450名である。寄宿学校からは11名の女生徒がこの日曜学校で教えている。

1895 年

p. 129

札幌

これまで札幌は、少し離れたところにある東京の一出張所のように扱われてきたが、もっと大きな存在として認められる資格があるように思われる。札幌には 1887 年以來サラ・C・スミス女史がおり、またここ一年はクララ・ローズ女史が加わっている。札幌の教会の報告によれば、同教会は日本人牧師のもと 120 名の会員を数え、このうち 36 名は過去一年間に教会員になった人々である。同教会はある程度自立している。教会員の中に多数青年がいるという特色は頼もしい限りである。同教会と結びついている、生徒数 330 名の安息日学校がある。また恵まれない子供たちのための安息日学校も女学校の礼拝堂で開かれており、同校の女生徒数名によって運営されている。札幌農学校の青年たちでキリスト教への関心が高いと思われる学生からなるクラスが一つあり、ローズ女史が教授している。

この女学校は [1894 年の「スミス女学校」からの改称により] この先「北星女学校」として知られることになるが、宿泊施設の不十分さゆえに苦境に立たされてきた。これまで使用してきた建物は学校として使用する目的で当局 [= 道庁] から貸与されていたのである。だがその使用期限が 1894 年 7 月に終了した。既に違う場所 [= 北 4 西 1、旧北海英語学校跡地] に満足のいく校舎が用意されている。同校に関して報告書は次のように述べている。

将来がこれほど前途有望に思われたことはない。同校は 1887 年以來漸次成長してきた。1887 年といえば、7 名の生徒からなる小さな一団がスミス女史とともに函館からやってきた年である。同校からは 8 名が過去一年の間に教会員になった。また他に多くの生徒がキリスト教に深い関心を抱いているようである。聖書についての教授が毎日行われ、毎週祈禱会が開かれている。

1896年

p. 144

北海道支部

福音主義教会——北海道（蝦夷）の印象は引き続き、最も活力がありかつ進歩的で、この帝国において開発が緊急に必要とされている期待の土地であるというものである。日本各地から年間数千人が入植してくるが、特に西海岸からの入植者が多い。人々の気質は自主的であり、我々の西部への入植者の気質と似ている。仏教（への信仰）は比較的浅く、悪が勢力を振るっている。行政当局はこの島が急速に発展することを期待している。我々の教会の仕事は6、7か所の重要な中心地にあり、そこから他の場所が日本人によって伝道されている。こうした場所の大半から、積極的に関わって活動している人がいるとの報告がある。札幌では新しい教会が竣工した。この建築には伝道局に1000円負担していただいた。上川では教会建設用の土地が用意された。一定期間内に建設するのが条件とされている。このことは、当該の目的のために（建設費用の半額である）200円を外部から調達する手腕にかかっていると思われる。滝川で建設された教会の土地は、キリスト教への信仰を明言していない同地の友人たちの援助を得て購入されたものである。スミス女史はかなりの金額を記念教会のために寄付された。この教会は恐らく小樽に建設される予定である。

p. 145

教育——札幌女学校 [=北星女学校] では生徒数が倍増し、現在55名が在籍している。昨年には専修科と予科の両方が加えられた。毎日祈禱会が行われている。聖書が毎日教授され、暗記される。女子2名が先ごろ教会員となった。教室で開かれている日曜学校には、目下70名が在籍し、平均40名が出席している。農学校からの何人かの人々が、女性宣教師の一人が教授している聖書の授業に出席している。そしてこのうち数名が既にキリスト教徒になることを考えている。ローズ女史および札幌出身の卒業生の一人が夏の活動のために小樽

へ向かった。結果は大変勇気づけられるもので、この活動は続けられた。小樽の恵まれない人々の中での彼らの日曜学校では生徒数が 100 名以上に達している。昼間学校の生徒数は約 30 名であり、そのうち 13 名は寄宿生である。ローズ女史はこの活動に毎週金曜から月曜まで赴いている。

1897 年

p. 128

北海道

北海道は北方にある大きな島であり、以前は蝦夷として知られていた。政府は大日本帝国のこの地域の開発に可能な限り迅速に取り組んでいる。新しい開拓移民が日本各地からやってくる。彼らはこの新しい土地では故郷にいるときのような世間や宗教などのしほりから解放されており、現在日本中でこの人々ほど新しいことを柔軟に受容出来る精神の持ち主は見つからない。札幌の商港である小樽は成長しつつある賑やかな街で、4 万人が暮らしている。

福音主義教会——札幌の教会はしばらくの間、宣教団からの援助に全く依存してこなかった。しかしながら現在、この教会には牧師がなく、ピアソン氏が説教壇に登っている。小さな教会が滝川に建設された。またこれより大きな教会がまもなく上川で建設される。こうした教会と関わっている任務は大変励みとなるものである。紋別の教会は新しいことをやる気になった。室蘭の信者からなる小さなグループは、教会建設用地のために惜しみなく出資してくれたことにより大いに称賛に値する。小樽ではピアソン氏が人々と友好的な関係にある。彼らは一人であるいはグループでやってきて教を乞うているのである。スミス女史には学校での仕事の他に、札幌教会とつながりのある複数の日曜学校での仕事も多い。生徒数は 400 名近い。夏にはスミス女史は特に内陸部で活動している。

教育——札幌の女学校 [=北星女学校] はスミス女史およびローズ女史の監

督下にある。教授面はローズ女史が多く受け持っている。女学校の生徒数は増加し、現在ほど繁栄していたことは未だかつてない。小樽にも明るい将来のある学校〔＝静修女学校〕が存在する。ローズ女史は当局からそこに居住する許可を取得済みであり、ピアソン氏が札幌に滞在する間はピアソン夫人が札幌の女学校でローズ女史の代りを務めることになっている。

1898 年

p. 141

ピアソン夫人からの報告は、女性の会合、戸別訪問、5つの異なる教会の会員からなる札幌女性慈善協会とともに活動している若い女性の裁縫クラブ、日曜学校数校、週に一度の聖書のクラス（ここには札幌農学校から10名の学生が加わっている）などについてである。札幌女学校〔＝北星女学校〕には、スミス女史の報告によると、107名が在籍している。このなかには小さな児童も含まれている。公立の学校に空きがないため入学が許可されなかった子供たちである。本年中に6名が教会員になった。もう少し年長になるまで教会員になるのを遅らせている人たちもいる。

小樽〔＝静修女学校〕ではローズ女史が70名の生徒を登録している。寄宿舎が廃止されてからは40名である。住吉の日曜学校はローズ女史の報告によれば、大勢の人々が開け放たれた戸口で話を聞き、キリスト教の小冊子を喜んで受け取るとのことである。

1899 年

p. 141

北星女学校——これは北海道にある女学校である。そしてこの名前の意味は「北方の星」の女学校である。

この女学校のレベルは北海道にある他のどの女学校よりも高いものとなっている。ただし函館にあるメソジストの宣教団による女学校 [=遺愛女学校] を除く。函館は札幌から 2 日間かかる距離にある。

女学校の校舎は、初めは納屋のようなものであったが、外観は大いに改善されてきている。

約半数の生徒が札幌市内の出身であり、残り半分はこの島の様々な土地の出身である。生徒たちの親は主に、新規に開拓された土地の農家、新たに築かれた街の商人、北部や西部の海岸の水産会社所有者などである。少女達は身体が丈夫で、賢く、自立した精神の持ち主である。本年中常に出席していた生徒の数は 75 名である。寄宿生は 32 名で、そのうち 15 名は全額自己負担、8 名が半額以上を自己負担、3 名が一部を自己負担、6 名は全額学校から支援を受けている。

本年中にキリストへの信仰告白したのは教員 1 名および生徒のうち 9 名で、ここには最上級性全員が含まれている。1 名を除き全員がクリスマスの日を受洗した。スミス女史が休暇で学校を離れてからはピアソン夫人がこの女学校を監督している。

1900 年

[日本政府は 1899 年 8 月に「私立学校令」を公布し、日本国内の子供は全員、6 歳から 14 歳までの間の少なくとも数年間は公立学校に通学しなければならなくなった。さらに特別な訓令（文部省訓令第 12 号）により、政府から認可を受け特権を持つ学校において宗教教育あるいは宗教的な儀式を行うことが禁じられた。このような規制は私立学校にまでも適用された。その結果、閉校した学校もあれば、登録者数が激減した学校もあった。明治学院は宗教教育や宗教行事を除外するよりも、政府認可および特権を返上することにした（1900 年 BFM 報告、141 ページ）。なお、この規制は後に撤廃された。]

札幌の女学校、すなわち北星女学校には113名が在籍し、このうち32名は寄宿生である。本年中に洗礼式が12回あった。このなかには教師の一人で長年決心がつかずにいた人と、通学生で新しいものを受け入れるのを躊躇しがちの年長の生徒の洗礼式が含まれている。

教育規制の結果、我が校では生徒数が減少している。昨年同時期は在籍生徒数113名であったが、現在（1900年1月3日）は50名である。初等部に12名生徒が在籍していたため、我々はこの生徒たちに学校を去ってもらうか、聖書にある教えをこの生徒たちに指導するのをやめるかしなければならなかった。むろん我々は前者の選択肢を選んだ。これに加えて、6歳から14歳の生徒たち15名、すなわち北海道知事自らによって公式に定義されている「学齡」（ただし東京の当局の定義によれば6歳から10歳）の生徒たちは、小学校の担当である行政の当局者の前で試験に合格し、政府からの教育方針などを満たしていると証明しなければならなかった。14歳未満の新生徒は全員この試験を受けねばならず、その結果、我が校への入学を考えていたものの、このような試験を受けることへの恐怖心から応募を取りやめた生徒が少なくとも一人いる。

この女学校で雇われている教師は全員キリスト教徒である。スミス女史は9月に休暇から戻った。女史は長きにわたり、一人の人間には重すぎる責任を負ってきたが、まもなく女史の活動に一人の同僚が加わる。

市の役人は女学校に大変好意的であり、我が校の課程をもう少しレベルの高いものにするよう勧めてくる。それにより市立学校の卒業生（年間約100名）が我が校に入れるだろうというのである。課程が現在の状態〔9月始まり〕であると、市立学校の卒業生は、我が校に入学するのであれば半年無駄にしなければならない。正式に言われていることだが、我が校と同様の高いレベルの公立学校は、向こう六年間は設立が不可能とのことである。我々の妨げとなるものはないように思われる。

p. 186

札幌ではピアソン夫妻が旭川の新たな家へと転居して以来スミス女史一人きりであったが、秋にウェルズ女史が加わり、北星女学校はスミス女史とウェルズ女史が運営した。在籍生徒総数は100名を超えるものであった。

現在こちらの教会は、明治学院からきた穏やかで崇高、そして熱心である清水牧師の監督のもと、かつてないほどに良い状態にある。

1902年

p. 172

そのほか北海道にある拠点は札幌と小樽である。札幌の女学校 [=北星女学校] には100名以上の生徒が登録されており、このうち3名が受洗した。スミス女史は次のように書いている。

生徒2名が学校を去りました。後ほど聞いた理由によれば、自分たちが弱くなりチャペルの活動の最中に涙を流すようになるのではと心配になったとのことです。二人が参加した二日間のうち、一日目は女子数名が、そしてもう一日は多くの女子がそのような状態であるのを目にしたためです。

日曜学校はウェルズ女史が担当している。

1903年

p. 189

教育——札幌女学校 [=北星女学校]

生徒総数 140 名。平均出席人数 100 名。先ごろ教会員になった人 23 名。教会会員 33 名。日本人教員 9 名。教会日曜学校会員 200 名。教会会員 33 名に加えてキリスト教徒が数名いるが、両親が受洗に反対している。

去る 5 月、政府が新たに女子のための上級学校を開校し、私たちはキリスト教信仰に強く反対する生徒数名を失ったものの、我が校の生徒数は減少するどころか、むしろ増加している。これはウェルズ女史による誠実かつ丹精のこもった働きと、建設予定の新校舎は生徒が自分の学校だと恥を覚えずに言えるものとなることのおかげであるのは間違いない。

夏の活動についてウェルズ女史は次のように書いている。

仙台に近い海岸で私が夏休みを過ごしている間、一人の日本人教員のおかげで貧しい漁村で日曜学校が開かれ、100 名近い子供が出席していました。日曜の午後に私たちがその村へ向かう際には、田んぼを抜けて走る小道をたどっていると、子供たちがずっと道沿いに私たちを待っていてくれるのを見つけたものです。この前の日曜日には、子供たちは野草をたくさん集めてくれました。貧しさの中、私たちが来たのを喜んでいることを示すために彼らに出来る唯一の方法でした。こうした漁村の貧しさと言ったらありません。貧しくて不浄で偏狭なのです。主の葡萄畑において顧みられることのないこのような場所にもっと労働者がいてくれれば。

p. 190

長老会は満場一致で「北海道中会 [=教区]」設立を認可した。

北海道には独立した自営の教会が函館と札幌の二か所にある。

1904 年

p. 178

札幌の寄宿学校 [=北星女学校] の生徒は 115 名で、このうち 23 名は本年中に受洗した。本年中、同校はウェルズ女史を失った。こちらの気候がウェルズ

女史には厳しすぎると判明したためである。しかし同校はシャーマン女史とワード女史を得た。ワード女史はこれまで大阪にいた方である。教授陣はしたがって同校の歴史上かつてないほどに強力なものとなるであろう。スミス女史は次のように書いている。

昨年はキリスト教への関心で学校が満たされ、年長の生徒のうち 23 名が教会に入りましたが、この関心は継続しているようです。そして、夏休みで学校が閉まる直前に、さらに 10 名が受洗しました。長年新校舎を待望して祈りをささげ努力してまいりましたが、いまやその新校舎が竣工しました。さらに素晴らしく快適な建物数棟で 60 名から 70 名の寄宿生を収容できますし、チャペルは来てくれる人がみな座れるような広さです。

p. 183

ジョンソン氏は次のように書いている。

女学校で私は一日二クラス受け持っております。一つは英語の聖書、もう一つは英文法であります。この二クラスを私が引き受けたのは、シャーマン女史の負担を減らして、女史がもっと言語の勉強のための時間と体力を持てるようにするためです。ワード女史が着任すれば、私はこの二クラスを譲ることになっております。日曜の午後には、農学校、師範学校、中等学校の青年たちのために、教会で聖書のクラスを持っています。クラスには 12 名の有望な若者たちがいます。そのうち 2 名を牧会職へと導きたいと考えております。彼らは立派なキリスト教徒であり、英語が良く出来、信仰的なことに大変熱心です。私がお家を得たならば、青年たちを招き親睦を深め、そのようにして次第により強力に彼らに影響を与えていく立場に立つ所存です。私の聖書の授業において内輪の会を組織するのが私の目的であります。この選ばれし青年たちに聖書の教えそのものを学ばせたいのです。目が開き始めて、聖書の中で明らかにされている神の栄光の数々を彼らが目にすれば、彼らを導くのは容易になると考えております。我らの主イエス・キリストの教えにある真理を勉強し、それを他の人にも教えることに青年たちの人生を捧げさせるのであります。

言葉も徐々に上達しておりますし、まもなく伝導する場所をこの町の郊外に開きたいと願っております。おそらくスミス女史の日曜学校と共同になるでし

よう。近所に日曜学校が欲しいと我々は願ってきました。しかし住民がいまだ建物から立ち退いていません。彼らが2月15日以前に立ち退くことはないと思われます。家内の失望は大変なものです。それと申しますのも、おそらく学校へ来ると思われる子供たちが少なくとも80名ないし90名はいるからなのです。この数字は女学校の校舎にて日曜学校が開かれた時の在籍者数でありました。

1905年

p. 202

札幌の北海道女学校 [=北星女学校] における人員の内訳は、ワード女史の報告によれば、11月時点で下記の通りである。

在籍生徒数	170名
寄宿生	48名
教会員である寄宿生	18名
教会員である通学生	13名

どの教会にもまだ所属していないがキリスト教徒 であることを明言している人	15名
宣教師である教師	3名
日本人男性	3名
日本人女性	8名

新校舎一年目の今年、ことあるごとに快適さや便利さが増していることが実感されている。生徒数は140名から170名へと増加した。通学生の中にも寄宿生の中にも、友情や学校への忠誠心という大変好ましい雰囲気が見られる。

1906年

p. 216

[ウェストン・T・ジョンソンの報告]

マルコによる福音書を学ぶ、農学校のとても素晴らしい学生たちを受け持っております。6月にこのクラスが解散する前に、永続的な結果を目にしたいものであります。妻が副知事のご令嬢たちを引き受け、外国の方法で教育しております。ご令嬢のお二人はお若くて大変聡明な女性であり、このお二人が我が家に指導を求めてお越しになるという事実は、宣教という仕事についても良い結果へつながる可能性があるかと十分考えうるものです。

[北星女学校に関するこの一年の報告]

札幌の女子寄宿学校 [=北星女学校] には 200 名が在籍してきた。平均 150 名が出席しており、192 名が学費を払っている。53 名は寄宿生である。本年度中に 10 名が卒業し、58 名が教会員となった。ワード女史は次のように述べている。

本校にて私どもは「クリスチャン・エンデバー・クラブ」と「ジュニア・エンデバー・クラブ」を始めました。どちらも大変活気にあふれています。このクラブは、以前あった「キングスドーターズ・クラブ」と「ヘルピングハンズ・クラブ」に代わるものです。日曜日ごとにとっても興味深い会合を開いているのに加え、様々な善行のためにお金を出しています。それには教会への献金や飢饉で苦しむ人々へささげた 16 円も含まれます。

1907 年

p. 232

札幌の北星女学校はこの一年大いに成功をおさめてきた。150 名が在籍し、そのうち 60 名は寄宿部にいる。同校は幸いにも札幌という、この島の社交および教育の中心地にある。本年中、同校は驚くほどの祝福を受けた。現在の生徒のうち 19 名と以前生徒であった 2 名が 1906 年に受洗した。

「シニア・エンデバー・クラブ」の責任者であるモンク女史が、信仰生活が自発的になっていることについて次のように書いている。「こちらでも、学校での週に一度の祈祷会でも、熱心な心が深まりつつあります。このことがさらに顕れているのは、キリスト教徒である少女達のグループによる毎週の集いです。まだキリスト教徒ではない自分たちのクラスメートのために祈りを捧げているのです。祈りの度にほぼ毎回『あの方々がまもなくキリスト教徒になりますように』『もうすぐご両親があの方たちが受洗することに進んで同意してくれますように』と心から祈っています」。

「この学校は北海道の教育面とのきわめて重要な結びつきを維持しています。公立の高等女学校は満員であるため、札幌の住民でなければ入学を希望出来ません。仮に札幌の住民ではないものが公立女学校に入学可能であるとしても、少女達が晒されることになる大きな危険を考えると、両親が娘を学校へ送り出すのを思いとどまるのも無理はありません。札幌に親戚が住んでいれば別なのでしょうが。公立学校には寮がありません。北星女学校の評判はこの島中に知れ渡っています。都市部から、そして内陸の地域から、キリスト教徒の家庭から、またキリスト教徒ではない家庭からも、こうした少女達はやってきて恩恵を受けているのです。キリスト教に反発している親ですら、喜んで娘を寄宿生としてこの学校へ送り出します。このような親を持つ娘たちの多くは、キリスト教の教えを熱心に受け入れます。

1908年

pp. 247-248

札幌の女学校 [=北星女学校] についてのスミス女史からの報告

福音伝道者である木村さんが北海道を訪れていた時、生徒たちと話をして欲しいとお願いしたところ、木村さんは話をしてくださり、大変良い影響がありました。80名以上が、キリスト教徒になり将来受洗することを決意したとして自分の名前を公表したのです。このうち約20名は長老派教会の礼拝に、20名は他の教会の礼拝に出席しています。残りの生徒は教会の礼拝へは出席していません（通学生）。この最後の生徒たちを引き入れるために私たちはあらゆる努力

をしています。ただし多くの場合、家族からの反対は克服不可能です。前者のうち7名は既に私たちの教会で受け入れてありますし、1月にはさらに多くの生徒を受け入れることになっています。

私たちの「スクール・フラワー・ミッション」では昨年とほぼ同数の花束を病院に届けました。その数は2900です。花束それぞれに聖句をつけました。

「留置所」から出所した男性から、朝夕の祈祷会での私たちの歌声に大変な感銘を受けたと言われました。場所が遠すぎて歌詞は聞こえなかったものの、収監者たちは皆その音楽を聴こうと耳を澄ませ、それにより深く考えることになったのです。カーター大佐が私たちの生徒を誉めてくださいました。大佐には我が校の生徒と他校の生徒との見分けがつく、我が校の生徒は街中でのふるまいが物静かでしとやかですから、とおっしゃってくださいました。このことが生徒全員にあてはまって欲しいと思います。それというのも一年前、我が校の生徒であることが即座に見分けられるようにと、公立学校がやっているように女子全員にスカートに同一の飾り付けを求める規則を作るよう要求された時に、私たちは生徒たちの好きなようにやらせようと決めて、生徒たちには、身につけているものではなく、品性や物腰によって、キリスト教主義の学校に所属していると分かってもらうのですよと言っていたからです。

私たちは今年、天皇陛下の誕生日を、実際の誕生日である日曜ではなく、月曜にお祝いしました。すると天皇よりも神をあがめたとして、譴責の手紙を受け取りました。手紙の差出人は、このような罪に贖いなどないと考えているようでした。似たような話が政府の役所でもあり、我が校は閉校させられるのではと恐れた人もいくらかいましたが、道理が通って、私たちが悩まされることはありませんでした。とは言え、天皇陛下の誕生日がすぐにまた日曜にくるのではないことを、私たちはうれしく思っています。

1909年

pp. 249-250

教育事業——札幌——北星女学校
——モンク女史の報告によれば、同女学校の在籍生徒数は合計 175 名、実際に

出席している者は 148 名である。13 名が 4 年間の学業のあと本科を終えた。生徒のうち 55 名がキリスト教徒であり、19 名は本年中に受洗した。

教員のかかなりの数を給費生から補充している。彼女たちは 2 年間教授すると約束してくれている。給料はごくわずかである。その後さらに 2 年から 3 年残るものもある。昇給はするものの、比較的低い金額である。実際のところ、公立の教員で彼女たちと同様の訓練と経験がある人の場合のおよそ半額である。

本年の早い時期に同校を訪れた行政当局の監査官は、運営、照明、換気、課程、指導など、あらゆる点で我が校に大変満足していると述べられた。登録者数が増加していることから、生徒のご両親もまた我々に益々好意的になっていることがわかる。今年の新入生は 80 名で、同校の歴史上、ある年度を除けば最多となっている。その例外とは日露戦争の年のことで、確かその時の新入生は 100 名であった。

寄宿生からなる「すみれ会」は引き続き善行を積んでいる。本年中、主にサンシキスマレやノウゼンハレンの花束を 2019 東、市内の病院に届けた。花束ひとつひとつに聖書の一節が書かれた紙片が結ばれた。このクラブはまた、教会や日曜学校などが行う様々な事業に、総額にして 6 円を寄付した。本年は、私たちの女生徒のうち 19 名が受洗した。受洗した 13 名のキリスト教徒が学校を離れ（卒業その他の理由で）、現在 42 名が在籍している。

1910 年

pp. 240-241

北海道の小樽市には、50 名が在籍している寄宿制の実業女学校 [= 静修女学校] と、園児 100 名が在籍する幼稚園がある。札幌においては、同地の女学校 [= 北星女学校] の報告によれば 152 名が在籍している。こうした教育機関は、その土地にて増えつつある我々のキリスト教徒が必要とするものに対しての聖職者の務めを果たしている。もちろんキリスト教徒ではない家庭から来ている

生徒を大勢惹きつけてもいる。

p. 241

現場から届く報告にはどれも希望に満ちた調子が見て取れる。各学校がこれほどまでに素晴らしい機会に恵まれたこともなければ、よりよい成果を得たこともまたない。福音伝道運動がまもなく、これまで日本で知られてきたよりもずっと大きな影響力を持つものになるであろうことを示唆する、数多くの予兆が見られる。

pp. 247-248

モンク女史による北星女学校、すなわちモンク女史、スミス女史、ムーア女史が働いている、札幌の女学校についての報告。

3月31日に24名からなる一学級が卒業しました。4名は英語学科、日本語学科とも本科を終えた全科修了、20名は日本語学科のみを修了しました。卒業生のうち14名は受洗したキリスト教徒であり、残る10名のうち一人を除いては、[形の上ではキリスト教徒ではありませんが]心の中ではキリストへの信託者であると思われます。

昨年は新生が多かったので(80名)、今年の新入生の数がわずか40名というのは大変少ないように思えました。しかしながら、苦難の時期にあって、この帝国中の女学校が私たちと同じように、あるいは私たち以上に新生生の減少を経験したのですから、気を落とすようなことはありません。減少したのは通学生の人数です。寄宿舍の空きは即座に埋まりました。これまでの在籍者総数は152名であり、昨年の179名と比べると約15パーセントの減少です。

キリスト教徒である生徒は25名ですが、本年中に教会に受け入れられた者の数は4名です。

教員と年長の生徒の10名が本年中日曜学校4校を維持してきました。出席者は合計で約250名です。

寮の「クリスチャン・エンデバー・クラブ」と「すみれ」会は、本年の間、様々な宗教上の目的および慈善目的のために38円81銭を寄付しました。

彼らはまた 6 円 80 銭を地元で必要とされているものに費やしました。「すみれ」会は夏の間、病院 5 か所に 1500 もの花束を配布しました。花束それぞれに、聖書からの適切な一節がつけられました。

ムーア女史がこの町の他地域における、順調に進んでいる日曜学校の仕事について次のように話している。

豊平での日曜学校は定期的に続けられてきました。登録者数は 100 名超ですが、平均出席者数は 60 名ほどです。今年の 1 月に私たちは同じ場所で集会を開き始めました。金曜の夜で、大人向けのものです。こうした集会の成果として 3 名が受洗しており、また現在、進んでキリスト教徒になると思われる人が数名います。

1911 年

p. 246

北海道と東京における活動では、本年中に宣教師 5 名を失った。キャンベル女史、ムーア女史、ドゥーリー女史、クインラン女史が、結婚、健康上の問題、あるいは帰国のために仕事から去って……

pp. 248-249

北海道における宣教団の組織的な仕事は、現在、北海道中会合同委員会 (the Hokkaido Presbytery Joint Committee) が全般的に見ている。

p. 249

北星女学校、すなわち札幌にある女学校についてのスミス女史からの報告。

生徒数	・・・・・・・・・・・・・・・・	134 名
受洗済みのキリスト教徒	・・・・・・・・・・・・・・・・	36 名

本年中に受洗した人 20 名
 受洗していないが、信仰を明言している人 67 名

これほどまでに皆が皆勤勉な生徒は初めてです。それに学校全体に活気が満ちあふれ、昨年同様申し分ありません。私たちの新しい裁縫室には毎日喜びを覚えます。私たちの 3 つの日曜学校にいつも出席している在籍生徒数は 220 名です。これには教会の日曜学校は含まれていません。教会の日曜学校にも教員を派遣していますが、モンク女史と私が直接指導している教師 3 名だけです。

1912 年

pp. 296-297

教育事業——北海道にあるミッションスクールは三校のみだが、そのうち二校は我々の学校である。すなわちスミス女史が監督されている札幌女学校 [=北星女学校] と、ローズ女史が監督されている小樽女学校 [=静修女学校] である。小樽は札幌からわずか 18 マイルと、この二校は地理的には近いものの、特色、ねらい、成員などはかなり異なっている。

スミス女史は次のように書いている。

我が校は昨年度ほど良いスタートではありませんでした。しかもその昨年度ですら一昨年度よりも悪いものだったのです。生徒数の減少が通学生に見られます。原因は至極当然なものです。二年前に文部省から勧告がありました。女子の高等教育よりも、裁縫、料理などのほうに力を注ぐようにというものでした。それ以降仏教徒のみならず政府自らもこうした科目を教授する特殊学校を開校しました。このような学校では生徒があふれ、その一方で女子のための公立高等学校や、もちろん私たちの女学校では、生徒数が減少しています。似たような科目を私たちの学校でも追加しましたが、これまでのところほとんど応募がありません。

昨年度 (1910-11) は 139 名を入学させました。このうち 30 名から 40 名は受洗したキリスト教徒であり、残りはほぼ全員、信仰と [受洗への] 希望を表明しています。また 21 名が本年中に他の教会に加えられました。寮には 60 名い

ました。現在の数もそれぐらいです。

学校から教師 2 名を教会の日曜学校へ派遣しています。またオルガン奏者 1 名および教師 11 名を日曜学校三校へ派遣しています。これらの日曜学校はモンク女史と私自身の福音伝道活動と関わりのある学校です。こうした日曜学校における平均出席人数は、日曜日ごとに約 205 名です。

1913 年

p. 253

北海道支部

北海道支部は、「伝道されていない地域が広大であるというのに、キリスト教徒は少なく、必要とされるものは多い」ことを考えるとき、「自身の宣教組織が小規模であることにどうしたものかと思っている。」彼らの小さな組織は人員が減少している。北海道への最初の伝道者であるピアソンご夫妻が休暇に入られたこと、さらにモンク女史が休暇に入られたことがその理由である。しかしながら 1911 年度に入った E. エヴァンズ女史が同支部に加わって北星女学校で働いており、教育と日本語の勉強とで忙しくしている。マクロリ女史も同校に着任する予定である。

p. 254

教育事業——北星女学校は札幌にあって、「今年は 25 周年を祝う年である。」
「同校は驚くべき成長を遂げた。生徒 6 名から始まったのが、今では生徒数 110 名で、新校舎は間取りが広く、かなり良い設備が整っている。卒業生が体育館を建設しようとしている。」

1914 年

p. 264

北海道

教育——教育の仕事についての報告には、福音伝道の仕事に見られるのと同様の、喜ばしい調子がある。

北星女学校——

3月に22名が卒業し、新入生は25名を数える。今年も例年通り9月に生徒が増加するようであれば、生徒数ははるかに多くなるであろう。昨年の4月から今年の4月までの間に生徒12名と教員1名が受洗し、いまでは1名を除いて教員は全員キリスト教徒である。年初以来さらに8名が、また卒業せずに昨年学校を去った2名が、教会員になった。現在女学校全体では生徒総数103名のうち、受洗したキリスト教徒が35名、受洗していないキリスト教徒が19名である。エヴァンズ女史とマクロリ女史が監督している「ジュニア・エンデバー・クラブ」と「シニア・エンデバー・クラブ」が、信仰上大いに目に見えるような影響を校内に及ぼしている。

1915年

p. 254

ローズ女史——長い間誠実に積極的な奉仕をされてこられた方に、我々は別れを告げねばならない。ローズ女史は女子学院から我々の島に来られた。北星女学校では、スミス女子を支える同僚として教授された。その後小樽へ赴任され、主に自分の意志で幼稚園と女学校 [= 静修女学校] を維持されたのである。ローズ女史の理想は、貧しくて他の寄宿学校には入学できない女子を、家庭内外で役に立つ生活を送る女子に育てることであった。ローズ女史の教え子たちは今では小樽だけでなく様々な土地で妻や母になっているが、その教え子たちもローズ女史の死を知れば心を揺さぶられ、女史のチャペルの壁に刻まれてい

たモットーを胸に思い浮かべることであろう。「Ich diene (私は仕える)」

p. 256

教育——先ごろ新校舎建設が実現できる運びとなり、学校は何にもまして喜んでいる。

札幌ではここ数年入学志願者が減少していた。新設の公立 2 校に人気が集まり、女学校に対する世間の関心に影を落としていたのである。校舎の老朽化、さらにはその危険性は、女学校にとって何の得にもならない特徴であった。しかしながら 3 月に、ニューヨーク女性伝道協会(the New York Woman's Board)*から資金を割り当てていただけるという知らせが入った。その額は十分大きなもので、校舎の最も古い部分を建て替え、付属校舎の比較的新しい部分は修繕し、暖房設備を整え、壁を塗り替えられる。我々の複数の女学校は、まず第一に、キリスト教徒を作り、キリスト教徒にふさわしい特性を身につけさせるためにある。北星女学校で 3 月に卒業する学年 17 名のうち、2 名をのぞく全員が教会の会員として受け入れられ、残る 2 名も教会員になることを真剣に切望している。今年エヴァンズ女史が金沢支部へ出向しているため、現実に必要とされるものに即した教育と福音伝道両面の強化計画を延期せざるを得なかった。

[*これはいくつかある女性宣教師委員会あるいは協会の一つで、米国長老教会の外国伝道局の組織内に存在した。こうした組織の会員は外国での宣教活動に携わる女性を様々な面で支援した。アメリカ国内の教会における資金集めや宣教教育、そして予算配分はもちろんのこと、宣教師の募集、任命、奨励にも積極的な役割を果たしたのである。]

1916 年

p. 264

北海道支部

p. 265

1914年のローズ女史御逝去以来、小樽は宣教師不在であるが、モンク女史が毎週訪問し、月に一度の母親の集い、青年男子の歌唱教室、青年女子の聖書のクラス、日曜学校二校などと共に、幼稚園を継続している。モンク女史はまた銭函の漁師の子供たちのために平日の聖書のクラスを開き、そのクラスでは福音を説く奉仕が行われている。

p. 265

教育

札幌の女学校には200名近い生徒がおり、そのうち80名が寄宿生であった。本年は洗礼式を13回行い、42名の求道者がいた。キリスト教徒ではない教員は1名のみである。同校の福音伝道の力強さは、活気のある大規模な日曜学校を四校も継続していることに顕れている。各校の「クリスチャン・エンデバー・クラブ」は、ベルギーの戦争被災者へ義援金を送った。エヴァンズ女史は札幌のYWCAを支援する機会を見出している。札幌YWCAはキリスト教徒ではない公立学校の女生徒の間で主に活動している。

1917年

p. 269

北海道支部

施設——札幌の北星女学校および小樽の幼稚園

我々のいわゆる「北海道支部」は、広さで言えばアイルランドほどの地域を範囲としているが、昨年この支部で宣教師が住んでいたのは札幌及びノッケウ

シの二町のみであった。今年は小樽が、3つ目の宣教師が住む町として加わった。それまで札幌にいたマクロリ女史が宣教師の会議を経てこの前の秋に小樽に居をかまえた。

p. 269

教育——北星女学校

本年度は124名の生徒ともに始まり、このうち35名は新入生であった。前年より新入生数は2名の増加、在籍生徒総数は31名の増加、前年同時期に比べ在籍生徒総数は31名の増加である。本年中にこのほか14名が入学し、本年度の総数は138名、平均在籍者数は120名である。

1916年3月、一学年12名が卒業した。4名は全科修了（このうち1名は日本語の勉強を修了済みであった）、4名が日本語学科を、4名が特別コースを修了した。卒業生全員がキリスト教徒であった。ただしこのうち2名は未だ公に自分の信仰を明言してはいなかった。本年中最大の変化が、1915年7月に起きた。長年学校長を務めてこられた仁平氏の退職である。北見という、この島の北の地域へ同氏が転居するために、退職を余儀なくされたのであった。

現在校内での一番の関心事は、おそらく「指定」すなわち当局 [=文部省] からの「認可」獲得についてであろう。指定を得るということは、我が校の卒業生が、公立にせよ公立同様と認識されている機関であるにせよ、高等教育機関への入学試験を受験できる権利を得ることと、高等学校教員免許状を取得できる権利を得ることを意味する。最近までこうした特権の必要性に対する認識が弱かった。「認可」を得るための主たる必要条件は2点ある。第一に、科学と体育用に最低限必要な設備だが、これには少なくとも500ドルを要する。第二に、政府機関による教員免許状を取得している教員を6名ないし7名擁することである。第一の要件については、おそらく30ドルあるいは40ドルに相当する科学機器を我々は所有している。第二の要件に関しては、該当する教員は3名である。我が校の他の卒業生たちの準備が整うまでは（2年ないし3年間）、私達の現在の月給に300ドルほど上乘せして（もう少し少なめの可能性あり）、教員免許状を持つ教員に月給を払う必要があるだろう。新年度についてのお知

らせ。幸先の良いスタートである。新入生が 57 名（このうちの多くは新しい寄宿舎に惹きつけられてきたことは間違いない）、一か月目の在籍生徒総数は 149 名である。

1918 年

p. 69

1892 年に任ぜられた、日本宣教団 (the Japan Mission) のメアリ・B・シャーマン女史が、1918 年 1 月 30 日に逝去された。

p. 251

スミス女史が自身の仕事について次のように書いている。

学校での教授の他に私が責任を負っているのは、日曜学校一校、「クリスチャン・エンデバー・クラブ」一つ、小冊子配布、戸別訪問、豊平での 2 週間に一度の福音伝道奉仕です。豊平は札幌の郊外にあり、我が校から二マイルほどのところですが、昨年の日曜学校への平均出席者数は 80 名でした。今年は 100 名にと願っていますが、それと申しますのも、私たちが借りている部屋は小さなものですから、2 羽のスズメが一本の枝の上にいるように子供たちにびっしり座ってもらっても、100 名がやっただからなのです。

p. 252

モンク女史による報告

本年の一時期、私は銭函で日曜学校とひと月おきの夜の集いを（こちらは現在デイヴィッドソン女史が引き継いでくれています）、また 3 か月間はエヴァンズ女史の日曜学校を担当しました。札幌学生 YWCA も私にとって大切なものでした。そこでの活発な活動の様子や、会員数が増え、関心が増していることを、私たちは大変うれしく思っております。北星の通学生の中にも、最近 YWCA に加入した生徒がいます。

エヴァンズ女史による報告

9月に中間休暇から戻りました。何事に対しても準備は出来ている気分でした。2か月間話をしたり訪問したり、5か月間故郷にいたりという気分転換と休息が、私にとって大変良かったようです。私が到着したのは札幌での大リバイバル運動の真っ最中であり、これに間に合ったことをうれしく思いました。救世軍のカナモリ氏がその週の集いを取り仕切り、そこには聖霊が大いなる力を持って臨在されていました。そのようなものは未だかつて目にしたことがありませんでした。キリスト教徒ではない人たちのためのスペースを確保するために、信者の人々にそこから離れていてくれるようお願いしなければならないほどでした。

デイヴィッドソン女史による報告

本年の一時期の間、銭函という小さな漁村に毎週通うという特権をいただいでいました。銭函では、私に同行してくれた日本人教員2名が日曜学校で子供たちに教えています。子供たちの数は一定ではなく、夏は25名ほど、クリスマス前には100名近くになります。一週おきに、私たちは戸別訪問して小冊子を配布し、札幌からの福音伝道者が行う夕べの集いに人々を勧誘しています。

教育——北星女学校——モンク女史が次のように報告している。

去年は祝福に恵まれました。教員免許状を持った教師4名がスタッフに加わりました。デイヴィッドソン女史が下関から赴任され小樽と札幌で奉仕されていましたが、身体に負担になったため、2か所を同時に受け持つことはなくなりました。その他2名の教師はキリスト教徒の家庭の出身です。4人目の教師は(この教師は公立高校でも教授しているのですが)、キリスト教信仰へと気持ちが傾いてきています。在籍生徒数の増加に元気づけられています。意外なことに、3、4名を除いて、新入生は皆、既に幾分キリスト教についての知識がありました。主に日曜学校を通じてのものでした。その一方で、一日勉強しただけで学校を去った女生徒が一人おりました。学校でキリスト教が教えられているというのがその理由でした。一つの学期が長いので、日本の学年歴はアメリカよりも祝日が多くなっています。天皇誕生日(10月31日)および神武天皇ご即位の日(2月11日)には、私たちは祈祷会でお祝いします。

p. 257

スターヂス・セミナー——昨年スターヂスで代用教員だったデイヴィッドソン女史が夏に札幌へ向けて発った。

1919年

p. 230

教育——北星女学校——この島における教育の仕事は急速に発展しており、この地域の物質的な成長にミッションスクールはとても追いつけるものではない。モンク女史は次のように書いている。

今年は常になく心配事の多い年でした。平生から厳しい節約を実践してきた組織としては、物価が絶えず上昇することに大きな不安を感じずにはいられませんでした。3月には勘定をすべて払い終えて年度を終了できました。新しく5名の教員が加わりました。これにより教員数が必要条件に達し、当局 [= 文部省] から指定を受ける準備が進行中です。指定を受けられれば、卒業するまで生徒に在籍してもらい易くなります。新入生のクラスは46名、在籍生徒総数は163名です。このうちキリスト教徒は5分の1にも満たないものの、40名が特別な関心を示しています。昨年度の卒業生は全員キリスト教徒でした。校内での仕事の他に、教員は全員外部での仕事をしています。じかに福音を伝道するような聖書の授業です。日曜学校と夜の礼拝が開かれているとある地域では、キリスト教への関心が大変なものとなっています。ある老婦人は「日曜学校の神様」を心から敬信するようになっていました。ただしまだその神様を父とお呼びすることには躊躇されています。

公立女子高等学校の生徒たちの間で聖書の授業を行っていますが、同校の校長はそのことに異を唱えるのをやめたようです。ある日、道徳について講義していた折に、キリスト教について知っている人はいますかと、校長が尋ねられました。これを聞いたYWCAの少女の一人が、この少女は私たちの教会の会員で

もあるのですが、手を挙げましたので、校長が言いました。「キリスト教では愛についてどのような教えがありますか。」少女は答えました。「キリスト教は愛に基づいています。」校長が言いました。「その通り。歴史上のどこにもイエス・キリストのような人物はいません。あそこまで人類に対する無私で純粋な愛を示した方はいままでにはいないのです。」生徒たちは驚嘆し、私達の YWCA の少女達は大喜びしました。

1920年

p. 279

教育——北星女学校——モンク女史の報告

本年で最も特筆すべき出来事は、1919年4月19日に、長年切望してきた当局 [=文部省] からの指定を得たことです。そのうえ、その特典は3月の卒業生にも適用できるのです。こうして女学校の歴史における新たな一章が始まります。

教員4名が女学校を去りました。このうち1名は聖書の訓練を受け始めました。五人目の教員は教えることからほとんど身を引いて、北海道帝国大学に入学しました。同大学初にして唯一の女子学生です。経済的な問題が差し迫っています。全員の給与を一年前の額から24%ないし30%引き上げる必要があったためですが、一年前の給与それ自体もその先年までの金額から15%引き上げられたものでした。燃料代もあらゆる供給物資も高値が続いています。

宗教面では、本年度起きた事柄で素晴らしいのは、東京高等師範学校出の教師の一人が、喜ばしいことに回心したことです。彼女キリスト教に関する知識はほとんどありませんでしたが、熱心で偏見のない人ですから、早速聖書を学び始め、既に信仰を持っている人たちに質問をたくさんしていたのです。7月、寄宿舎での静かな集まりの後、自身の信仰を告白し、10月には公に信仰告白しました。今年の卒業生11名のうち、2名を除く全員がキリスト教徒でした。

1921 年

p. 296

日曜学校——日曜学校は豊平郊外、札幌の大学教授の家、銭函、その他の場所で開かれている。

札幌のある家族は銭函の日曜学校に大反対で、一家の祖父の日曜日の仕事は、小さな孫を日曜学校に行かせないことである。それでもなんとかその男子は、幾度か学校の入り口まではたどり着いている。そんな小さな子供たちの新しい先生は、北星女学校と女子学院の卒業生であり今では北星で教えている人だが、生徒たちの歌唱力を大いに向上させてくれている。日曜学校だけでなく、夕べの祈祷会での歌もである。夕べの祈祷会では、日曜学校の年長の少女達 12 名あるいはそれ以上が、聖歌隊のようなことをやっている。

教育——

北星女学校——生徒数増加に対応するため、理科教室を通常の教室として使用し、職員室は小さめの部屋と交換して、寄宿舍の大部屋 2 室からは教室を 1 部屋作った。手洗いの上階にあたる小さめの部屋 4 室を寄宿舍の用途にあてている。

入学志願者が過去最高となり、初めて入試が必要となった。4 月には一度に受け入れる人数としては過去最大の新生を迎えた。指定を受けたことに関連して報道で大いに注目されたこと、指定それ自体、および農業界が全体的に景気がいいことなどが、生徒数増加の要因である。

1922 年

pp. 294-295

[執筆者は不明]

結論：…… 日曜学校の偉大なる価値および成功が制限されている唯一の原因は、私達の地方の教会において優秀な教員が極度に不足していることである。事実だとすればおかしいことがある。すなわち、我々の女学校は主にキリスト教徒をつくり、キリスト教徒としての人格を育てることを目的としているというのに、我々のミッションスクールの卒業生のなかに、自分たちの故郷に帰った時、日曜学校あるいは教会の仕事始める準備のできている者は比較的少ないのである。

pp. 295-296

教育

札幌、北星女学校——本年度の卒業生 20 名のうち、2 名以外は全員、受洗したキリスト教徒である。この学年で高等教育機関へ進学した生徒は 3 名のみというのは遺憾なことであった。2 名は銀行に就職し、1 名は小樽の長老派幼稚園の助手になり、少なくとも 2 名は小学校教諭である。小学校教諭の一人が書いてくれた手紙によると、自分の他にもキリスト教徒が 1 名おり、またキリスト教について知っている者が 3 名いるので、皆で週に 2 度集まる予定だという。卒業生のうち 2 名がここで勉強を続け、残りの卒業生は故郷に戻っている。現在、上級生は数が少ないものの、優秀な生徒たちであり、既に年少の生徒たちに良い影響を与えている。

進徳会は学校のクラブの一つで、上級生が役員になり、各学級からの代表者がいるが、今年は自治という目的に向かってさらなる進歩を遂げている。

北海道の女子は活発で、したがって南の方に住む女子よりも粗野な所が見受けられることがしばしばである。北海道の女子は開拓民の家系であり、寛大で意志強固である。たいていの子が戸外にいるのを好んでいる。

北星は良い年が来るのを期待している。市の中心部にあるため、校地が限られている。利用可能な場所は全て利用し尽くされている。しかしながら次の夏までには市の郊外にある山間部へ移転できればと願っている。そこであれば施設を拡充して呼吸できるようになり、心行くまでスキーを楽しむことであろう。

1923 年

p. 177

我々の女学校 5 校、すなわち東京、札幌、金沢、大阪、下関の女学校では総計約 1500 名の女子を教育しているが、信頼できる堅実な仕事ぶり、日本の精神的な豊かさに対する多大なる、それどころか計り知れない貢献を示している。

p. 178 [より広大な校地の必要性が明治学院において切迫しているのを話題にして]

札幌にある我々の北星女学校も同じ類の必要に迫られている。ただし札幌はこの帝国の首都ではないため、費用ははるかに少なくて済む。札幌であれば、郊外にもっと広い土地を購入して校舎を建設するという計画は、およそ 5 万ドルあれば達成可能である。

我々の各女学校は、いただくばかりでなく与えることもある。北星女学校にいる我々の宣教師の一人が、ある友人から手紙を受け取った。その方はウエストバージニア山地の住人の間で宣教している女性で、手紙のなかで、彼女自身がもらった小さな日本の人形がほしいと、なけなしの貯金をはたこうとした子供たちのことを教えてくれた。この話が北星の女生徒たちに伝えられると、アメリカの山間部の学校にいる子供たちのために、かわいらしい日本の人形に服を着せてあげたい、あるいは服の生地を提供したいとあって、生徒たちが殺到した。11 月、人形が集められて展示された。アーモンド型の目をした 250 人の生徒たちが胸を躍らせながら、やわらかな生地の明るい色の着物を着た人形 70 体の見おさめをして、人形たちをカンバーランドの山々への長い旅へと送り出した。

1924 年

p. 185

北海道の札幌学校 [=北星女学校] にいる女生徒 256 名のうち、「決断の日」に 40 名が、キリスト教に関わる活動をしていきたいとの願望を表明した。36 名は、本年中に少なくとも一人はイエス・キリストへ導くという決意を表明した。86 名は他の人々のために毎日お祈りをすると約束した。35 名ははっきりとイエス・キリストを受け入れ、受洗を求めた。66 名は、キリスト教徒として生きるとはどういうことなのかをよりよく理解できるよう祈ってくださいと求めた。

1925 年

pp. 183-184 [1923 年の関東大震災後の救援活動に関して]

極北にある札幌の北星女学校は、大震災からわずか 10 日後の 9 月 11 日には、24 個の大きな包みを届けていた。その中身は大きめの衣類 2520 着、寝具 54 組、多くの細々とした物などである。また大きなかごいっぱいの欧風衣類と寝具も届けた。その後、新品の衣類 100 着以上を作って届けた。これは義援金 109 円に加えてのものである。

1926 年

p. 148

札幌の北星女学校：「教育面で一步前進である。現在の課程の上に置く、3 専攻化からなる 2 年間のカリキュラムを整えたのである。3 専攻科とはすなわち、宗教教育 [=聖書]、英語、家政である。」

p. 149

ミッション高校 5 校それぞれにおいて、宗教教育、主に聖書研究が、全課程を通じて生徒各人に必修とされる正課の一部となっている。各年に一、二回、

特別な集会で、または外部の福音伝道者によって、あるいは常勤の教師で的確な者が導く個別相談またはグループでの相談によって、年長の女生徒たちは個人として自分の命をイエス・キリストに捧げる機会を得る。こうした女子たちはまた、教会で積極的に活動する会員になることによって、自分の決意を公にすることを奨励されている。この5校の報告によれば、受洗済みの女子が120名、その他大勢が両親から許可を得られ次第受洗したい旨を表明済みである。

1927年

[学校その他の組織設立の際、通例、宣教師はその新組織独立の促進に努めてきた。この進展の速度および過程については様々な議論があるが、新たに設立された組織は外国からの援助に依存する段階から始まるのが典型的な傾向とされてきている。しかしながら健全な成長が続くのであれば、現地における資源および指導力が発達し、それとともに自治に向けての動きが継続して活動を開始した宣教師を超えていく。この点において、生徒や卒業生による自助が増加していることを示す兆候は、このような報告を受けた宣教師や出資者の励みとなるものであったことは疑いない。]

p. 143

宣教団は五つの女子中等学校を運営した。この5校はそれぞれ5つの地域の宣教活動計画の戦略的な中心部にある。すなわち西日本の下関にあるスターズ・セミナリー [後の梅香崎女学校、下関梅光女学院]、中部日本の大阪にあるウィルミナ女学校 [後の大阪女学院]、中西部沿岸にある金沢の北陸女学校、中東部沿岸にある東京の女子学院、そして北方の島北海道の札幌にある北星女学校である。生徒は300名から400名の女子で、この大半は入学時にはキリスト教徒ではない。

……この5校の卒業生および支持者は、財政上の負担を助けるうえでの自分たちの役割を担うことができるようになってきている。……北星の新施設用として、以前からの財源10,823円が、一寸した寄贈品や、毛布と洗濯石鹼の売り上げのおかげで17,000円に増加している。

p. 144

北星では昨年、42名の女子が受洗した。全校生徒314名のうち、119名が受洗したキリスト教徒であり、また他の76名はイエス・キリストに従うと公に認めている。

1928年

[この年の報告にはスミス女史や北星女学校への直接の言及はない]

1929年

[この年の報告にはスミス女史や北星女学校への直接の言及はない]

1930年

p. 116

遠方の北海道にあるもう一つの支部までは、列車と汽船で2500マイルはあるであろう。

42年前、我が宣教団の仕事は札幌の馬小屋から始まった。キリスト教自体も家畜小屋で始まったものである。北星女学校は馬小屋の段階からは遥かに進歩している。数年間にわたり、宣教団は新たな場所と新校舎を得ようと努力してきた。昨年のクリスマスには、新校舎〔南5西17〕がほぼ完成した。今日北星は、北海道にある女学校の筆頭であるとの評価を得ている。北海道の新たな開拓生活のあらゆる面で、卒業生はキリスト教の精神を生かしている。その一人は北星の寄宿舍の寮母である。女子生徒たちへの彼女の愛情あふれる指導にはほとんど信じられないほどの能力が現れている。ある卒業生は「イエス・キリ

ストについて教える人になりたい」といい、またある卒業生は「本当のお姉さんとして若い女子たちを導きたい」と望んでいる。

1931年

pp. 121-122

学校のシンボル、星の光

我々の女学校2校が星を記章に用いていることから、星の光を学校の校章として用いることは適切かと思われる。これら女学校はイエス・キリストの真理を方々に広げているのである。カガワ氏が言うには、福音伝道者としての任務でキリスト教の女学校の影響が及ぶ範囲内に入るたびに、違いを感じるのだそうである。すなわち、キリスト教徒である女性や少女が少数いるだけで、その集団には光がささずにはいられないのである。

日本宣教団(the Japan Mission)の女学校の事業の成果は5つの頂点を持つ星である。5つの頂点とは札幌の北星女学校、東京の女子学院、金沢の北陸女学校、大阪のウィルミナ女学校、下関のスターヂス・セミナリーである。下関ではオランダ改革派宣教団(the Dutch Reformed Mission)とともに取り組んでいる。こうした学校からの報告書で特に繰り返し見られる言葉もまた5つある。すなわち奉仕、犠牲、知識、友情、愛情である。

各校の宗教カリキュラムには細部においての相違点があるのみである。5校とも毎日チャペルでの礼拝があり、聖書の学習が正課の一部となっている。校内に教会を設置することの適否を考慮中、あるいは試験的に設置しているという学校が数校ある。校内に教会があると、少なくとも二つの点で好都合である。生徒たちは自分の必要とするものに合っている礼拝からもっと得るものがあり、受洗の許可を生徒の両親から得やすくなる。それというのも、生徒たちの両親は、教会へ同行したり、様々な人の集まりである礼拝に付き添いもなく娘を出席させたりするのが好まないことが多いからである。この計画に明らかに伴う危険性、すなわち教会活動が生徒にとって単なる学校での日課となり、学校を終えると同時に「卒業」するものとなること、また校内の教会が一般の教会と

協同するものというよりも競争相手となってしまうこと、こうしたことを防止する取り組みがなされている。

他にも多くの宗教活動が各校にあり、在籍生徒 1542 名のうちの多くは既にキリスト教徒で、181 名は本年中に受洗した。自分は本当は信者であると生徒が思っているにもかかわらず、両親が娘の受洗承諾を拒否することがたびたびある。

しかしながらこうした女学校はまず第一に「学校」[すなわち教育機関]であり、高い水準を保っている。各校とも宣教師である教師が 3 名から 4 名いて、その教師たちを 20 名あるいはそれ以上の日本人教師が補っており、カリキュラムには近代教育が必要とするもの全てが含まれている。1 校を除き校長はすべて日本人である。ただし運營業務の多くは、依然として宣教師が行っている。

札幌の北星女学校では今年 [1929 年] 竣工した新校舎に入って大変喜んでい。建設中には水曜ごとに作業員の方々のために礼拝が行われ、キリスト教徒である請負業者がしばしばその礼拝で話をした。作業員 3 名が信仰を告白した。

1932 年

[この年の報告にはスミス女史の仕事についても北星女学校についても直接の言及はない。]